4 拍子

Junko Higasa

小宮豊隆編「寺田寅彦随筆集」全五冊（岩波文庫）をようやく読み終えた。「ようやく」というのは決して内容がつまらなかったわけではない。文字が 9 ポイントくらいしかなくて目が疲れるからである。夏目漱石の講義ノートではないが「蠅の頭」ほどの文字を読み続けていると脳が酸欠を起こす。したがって目が疲れているときは読まないので、なかなか読み終わらなかった次第である。岩波書店は歴史を重んじるせいか初版を忠実に守るらしい。夏目漱石全集復刻版の時も、英語ができる人が少なかった時代のミスプリントをそのまま復刻させていた。私は書店のこだわりより漱石の名誉を重んじてあげればよいのにと、少し漱石が気の毒になった。まるで漱石が英語のスペルを間違えたみたいだから。昔の雰囲気を残すか、読みやすさに重点を置くか、それはあずかり知る処ではない。もっとも版を組み直すには時間と費用が必要だろう。

それはさておき、寺田寅彦は物理学者である。したがって専門の音響学研究はもとより、特に地震研究について大いに参考にすべき点があった。彼は当時の研究にとどまることなく、将来的にこういう研究が必要になるだろうということも的確に示唆している。この頭脳が現代に多数あったらよかったのに。もし彼の言う内容の研究を政治家が取り上げていたら災害は最小限で食い止められただろう。科学者に必要な予算を与えずに研究の成果を活かさないのは何も現代に限ったことではなかった。昔からの日本の習性であったと痛感した。日本の地形と気候によって予測できる火山の噴火、地震、津波。予測しつつも風土の関係で生活しやすい建物を建築しなければならない矛盾。東京人の私は毎年同じように九州が台風被害に遭うニュースを見て「何故対策を講じないのか？」と思っていた。「天災被害の拡大は人災である」という寅彦の評価は政治家に読んでもらいたい箇所である。科学者は予防の方法、あるいは被害を少なくする方法を知っている。科学者がいくら研究してもそれが兵器として利用されるのではなく、良い方に生かされなければ科学の存在意義が薄い。予算の仕分けなどは中央が机上でやるのではなく、その土地に住み、自然を熟知した人がやるべきだと思う。

さて、寺田寅彦は物理学者であると同時に夏目漱石の弟子だった。随筆集には漱石との出会いから始まった「俳諧」について多く記されている。また数多くの映画評論の中でも「俳諧趣味」を取り上げている。それほど俳句に造詣が深かった。その中で私の興味を引いたのは、音響学研究者・寺田寅彦ならではの「俳句」の中の「拍子」である。ご存じ俳句は五、七、五。多少字余り。しかし字が余り過ぎるものは散文となる。そこの微妙な言葉の拍子についてである。それを読んで私は俳句を口に出してみた。すると 4 拍子にぴたりと当てはまる。日本人はワルツの 3 拍子が苦手な民族と言われるが、日本の文化の中で培われてきたのは 4 拍子だったのだろう。俳句にかぎらず短歌も同様である。与謝野晶子の「やわ肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君」が１つの美しい曲になるように、また松尾芭蕉の句が音響的に優れているように、日本の言葉の文化は４拍子の音楽なのだと改めて認識した。何故改めてかというと、私が歌詞を作る場合も言葉の区切りに５文字、７文字が多く含まれるからだ。これは日本人が歴史の中で培ってきた呼吸なのだろうと思う。　(2012.7.25)